

子ども虐待防止「学生によるオレンジリボン運動」の実践

——ゼミにおける6年間の取り組みを振り返る——

村田 一 昭

はじめに

2000（平成12）年の児童虐待防止法以降、日本における子どもへの虐待に対する取り組みは本格化したといえる。しかし、児童相談所の子ども虐待に関する相談対応件数は一貫して増加し続け、2022（令和4）年では20万件を超えている¹⁾。それだけ、子育てに対する社会的な関心が高まっているといえる。その子育てに対する社会的関心の高まりは、子ども虐待防止を目的とした「オレンジリボン運動」という市民運動にも現れている。本ゼミにおいても、2018年度から「学生によるオレンジリボン運動」に取り組んでいる。

そこで本稿では、子ども虐待防止「オレンジリボン運動」とその学生版である「学生によるオレンジリボン運動」の概要を説明した上で、本ゼミにおける6年間（2018年度～2023年度）の活動を振り返り、その課題と今後の活動の展望について述べることにする。

1. オレンジリボン運動とは…

オレンジリボン運動とは、2005年にはじまった子ども虐待防止の広報・啓発を目的とした市民活動である。この市民活動のきっかけとなったのは、2004年に発生した虐待死事件、俗にいう「小山事件」²⁾である。この事件によって、3歳と4歳の幼い命が奪われたことを機に栃木県小山市に活動の拠点をもつ「カンガルーOYAMA」が、翌2005年からオレンジリボンキャンペーンを始めた。その後「NPO法人里親支援のアン基金プロジェクト」の協力によって発展し、その後、2006年に現在の認定NPO法人児童虐待防止全国ネットワーク（以下、児童虐待防止全国ネットワーク）に引き継がれ現在に至っている。

このオレンジリボン運動は、子ども虐待防止のシンボ

ルマークとしてオレンジリボンを広めることで、子ども虐待をなくすことを呼びかける市民運動である。そして、この運動を通して、子ども虐待の現状を社会に伝え、多くの人に子ども虐待に関心を持ってもらい、市民ネットワークによる虐待のない社会を築くことを目指している。オレンジリボン運動の啓発活動としては、「春のオレンジリボン運動」、11月の児童虐待防止月間に実施している「オレンジリボンマスクの配布」、啓発を目的とした「オレンジリボンポスターコンテスト」、自治体とのコラボによる「オレンジリボンフォーラム」、市民と虐待防止を考える「市民ミーティングワークショップ」などがある。このほかにも、児童虐待防止推進月間である11月を中心に全国各地で講演会やイベントなどが開催されている。

2. 学生によるオレンジリボン運動とは…

学生によるオレンジリボン運動は、2012年の「社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会第8次報告」において、「近い将来に親になりうる10～20代の若年者などに向けた虐待予防のための広報・啓発」との提言によりスタートした。その目的は、学生がオレンジリボン運動を主体的に行うことにより、学生自身が子ども虐待問題に関する理解を深めるとともに、周囲の学生にも関心をもってもらうことにある。そして、実施する学生の創意工夫により行うことが求められている。初年度は厚生労働省の呼びかけにより7校の大学・短大が参加している。2015年からは児童虐待防止全国ネットワークが運営を担当し、2023年度では全国で70校が参加している（図1参照）。

主な活動内容としては、大学祭などのイベントでのオレンジリボンの配布、オレンジリボン運動のパフレッ

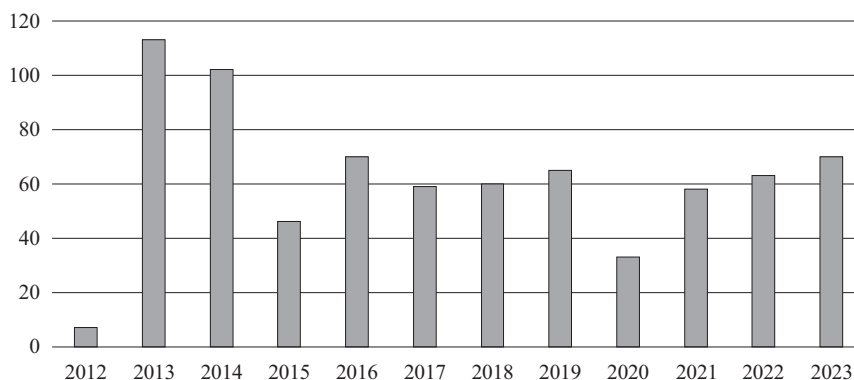


図1 学生によるオレンジリボン運動への参加校の推移
認定NPO法人児童虐待防止全国ネットワークホームページより筆者作成

トの作成・配布、オリジナルポスターの作成・掲示、図書紹介、映画上映、学習会など、多岐にわたっている。

3. 本ゼミにおける6年間の活動：2018年度～2023年度まで

本ゼミでは、学生によるオレンジリボン運動がスタートした6年後の2018年度より本格的に取り組みをはじめた。それ以前には、毎年、夏季休暇を利用し、児童相談所、児童養護施設、児童自立支援施設、児童心理治療施設などを訪問し、子どもたちの置かれている現状と子ども家庭福祉実践現場の理解を深める活動を行ってきた。その活動を発展させることを目的に、当時、ゼミに所属していた3年生7名に参加を促し、全員の了承を得て、活動をスタートさせた。図2は、6年間の取り組み内容をまとめたものである（図2参照）。これらの取り組みの経過について、4期にわけて、各時期の新たな

取り組みを中心に報告する。

① 2018年度：活動の土台作り

2018年5月の授業後に、当時のゼミ生7名に対して、学生によるオレンジリボン運動の概要を説明し、参加を促したところ、全員が活動の主旨に賛同したことから、この活動への取り組みが始まった。そこでまず行ったことは、活動の基本理念の確認である。広報・啓発活動には継続性が重要であることから、単年度で終わることのない活動にしていくことを目標に、「続けること・続けられること」を理念として掲げて活動に臨むこととした。つまり、「やり過ぎないこと・やり切らないこと」である。このことは、メンバーが変わっていくゼミにおいて、とかく、単年度のイベント的な活動となりやすいことを防ぐためである。

初年度は、「子ども虐待認知度調査」をメイン活動として位置づけ、学内に調査用紙を掲示し、在校生、教職

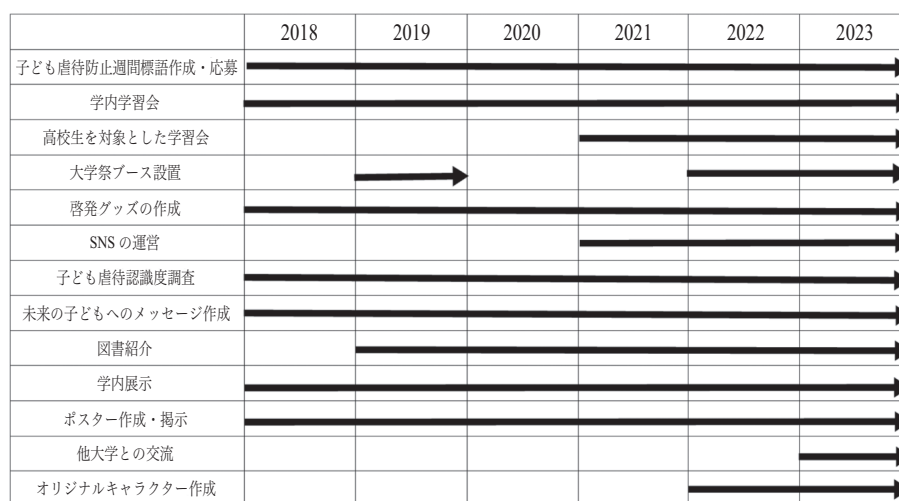


図2 これまでの主な活動

2023村田ゼミ「学生によるオレンジリボン運動」活動報告会 PowerPoint 資料を一部修正



図3 子ども虐待認知度調査と調査風景



図4 オリジナル啓発ポスターと啓発グッズ

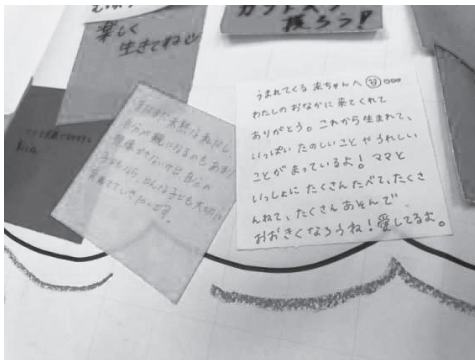


図5 未来の子どもたちへのメッセージ



図6 学内学習会

員を対象に実施した。また、同時に「未来の子どもたちへ」と題してメッセージ作成を依頼した。加えて、オリジナルのオレンジリボン運動啓発ポスターの作成と学内での掲示、オレンジリボンをモチーフとしたグッズ（しおり）を作成し、学内にて配布した。さらに、ゼミでの学習の成果として、学科1年生を対象に学習会を実施し、オレンジリボン運動の啓発と事例検討を行った（図3～6参照）。

2013年2月に東京青少年オリンピックセンターにて開催された活動報告会（児童虐待防止全国ネットワーク主催）にて報告し、厚生労働省児童虐待対策室長特別賞を受賞した。「子ども虐待認知度調査の実施と分析に学生らしさが出ていること」が受賞の理由として講評された。ビギナーズラック的な要素を含みつつも、今後の活動継続のモチベーションへとつながる結果となった。

② 2019年度：受動的活動から能動的活動へ——大学祭での活動展開

活動2年目は、前年度の活動を引き継ぎつつ、大学祭にブースを出展し、主に来校した親子に対するアプローチを試みた。来校した子どもたちと協働でオレンジリボンをモチーフにしたオリジナルグッズ（しおり）を作

り、完成したしおりを持ち帰ってもらうことで啓発にも努めた。また、同行した保護者には掲示物を通して、オ



図7 大学祭ブースの風景と作成グッズ



図8 図書紹介とパネル展示



図9 オリジナル啓発ポスター

レンジリボン運動の起源などを紹介した。100名以上の親子が来場し、地域住民に向けて発信することができた。また、併せて、前年度に引き続いて、来場者を対象に子ども虐待認知度調査も実施した。大学祭での活動以外の新たな取り組みとしては、学内図書館の協力を得て、子ども虐待に関する図書紹介とオレンジリボン運動の啓発を目的としたパネルの展示を行った。さらに、学内の一部の職員にオレンジリボンを配布し、オレンジリボンを身につけてもらうことで啓発活動に協力してもらった(図7~9参照)。

活動内容を拡大したことによる学生の負担はあったものの、大学祭や図書館とのコラボ、職員への働きかけなど、直接的な活動による手ごたえを実感できていたようである。また、2014年2月に東京青少年オリンピックセンターにて開催された活動報告会(児童虐待防止全国ネットワーク主催)にオブザーバーとして参加し、他大学・専門学校の活動報告を聴き、今後の活動の充実と拡大を図るための情報収集を行った。2年間の取り組みを通して、本ゼミによる活動の骨格が形成されたといえる。

③ 2020年度~2021年度：コロナ禍における活動の限界と新たな取り組み

活動の範囲を学外に拡げるきっかけづくりを目標としたものの、新型コロナウイルス感染拡大によって、対面での活動に制限が加えられたことにより、活動内容も縮小せざるを得なかった。第一に大学祭での広報・啓発活動が実施できなかった点が挙げられる。前年度より取り組みをスタートし、2年目はさらに展示内容の充実や来場した子どもたちへのレクリエーション企画などを予定していたが、実施は見送ることとなった。しかし、そのなかで、WEBを使った子ども虐待認知度アンケート調査やX(旧Twitter)やInstagramを活用したSNSによる

活動内容の発信といった新たな取り組みにチャレンジすることができた。また、前年度から学内図書館とのコラボによりはじめた図書紹介は大学ホームページを活用して継続することができた。加えて、図書の貸出に際して、オリジナル啓発グッズのしおりを配布してもらい、啓発活動につなげた。一方で、対面での活動が緩和されるなかで、大学



図10 学内展示



図11 QRコードを掲載したしおり



図12 オリジナル啓発ポスター



図13 ミニオープンキャンパスを活用した
高校生向け学習会

でのミニオープンキャンパスを利用した高校生向けの学習会を企画し、「虐待とは何か」という問いに対して、グループワークを通した事例検討を行った。参加した高

校生からは、「地域ぐるみで取り組むことの大切さを学んだ」、「子どもの視点に立って考えることができた」などの感想があった（令和3年度学生によるオレンジリボン運動愛知県立大学実施報告書）。WEBを活用したアンケート調査は、QRコードを掲載したオリジナル啓発グッズのしおりを図書館利用者、学内の職員、自治体主催の講演会への出席者に配布して実施した。その結果、大学内だけでなく、学外の地域住民や行政職員へと対象の拡大を図ることができた。併せて、これまで学内だけで実施していたオリジナル啓発ポスターの掲示を、最寄り駅構内をはじめとして、近隣の図書館、児童館、社会福祉協議会およびゼミ学生の母校（高校）に行った（図10～13参照）。

コロナ禍という活動制限、縮小化のなかで、WEBやSNSを活用した活動ができたことは、活動の新たな展開を感じさせるものとなった。また、SNSを通じた活動紹介は、同様の活動を行っている団体や個人との情報交換を可能にし、「つながり」の大切さを実感できる内容となった。この気づきは、高校生向けの学習会の経験と相まって、次年度以降の“仲間づくり”に繋がっていくことになった。さらに、学外でのオリジナル啓発ポスターの掲示は、地域に活動の場を広げていくきっかけづくりになったといえる。

④ 2022年度～2023年度：コロナ禍を経て、仲間づくりへ

新型コロナウイルス感染の影響が残る中で5年目以降の活動ではあったが、徐々に、学内から学外への活動の範囲を拡げることができた。

2022年度は、新聞やインターネットの記事を収集し、改めて、小山事件の背景や発生要因について検討することからはじめた。その学習を踏まえて、在校生に向けた学習会では、この事件の重要なポイントであると考えられる場面をピックアップし、事例検討を行い、地域住民の気づきが大切であることを伝えることができた。さらに、2021年度に実施した高校生向けの学習会を、前年度に引き続きミニオープンキャンパスを活用して実施した。虐待の日常性を周囲の気づきの大切さを伝えることを目的に、場面検討を行った。加えて、対面での開催が再開した大学祭において、来場した子どもたちを対象にしたしおり作りを中心にその保護者やその他の来場者を対象とした子ども虐待認知度調査を実施した。また設置したブースには、これまでに作成したオリジナル啓発ポスターを掲示するなど、これまでの活動の紹介を行い、オレンジリボン運動の広報・啓発を行った。また、親子での来場者には、「子から親へ、親から子へ」のメッ

セージの記入を依頼し、親子のお互いの思いあう気持ちを伝えあう取り組みを行った。



図14 親子メッセージ



図15 大学祭ブースでの子どもたちとのしおりづくり

2023年度は、学内での活動を充実させつつ、学外への活動の展開を試みた。そのひとつが、他大学を訪問し、活動の紹介を通じた交流を図ることによる“仲間づくり”への取り組みである。本ゼミと同じく子ども家庭福祉を専門とする法政大学現代福祉学部岩田美香教授のゼミに所属する学生との交流を行った。その結果、同ゼミも学生によるオレンジリボン運動の実施校に加わり、その活動結果は、児童虐待防止全国ネットワークのホームページ（「令和5年度学生によるオレンジリボン運動法政大学実施報告書」）に掲載されている。同じく、“仲間づくり”の取り組みとして、オリジナル啓発ポスターの掲示を依頼したゼミ学生の母校（高校）のひとつに活動の紹介と併せて、「未来の子どもたちへのメッセージ」の記入を依頼した。また、高校生を対象とした取り組みは、前年度に引き続き、ミニオープンキャンパスを活用した高校生向け学習会を行った（図14～18参照）。

これら以外にもオリジナル啓発ポスターの作成・掲示およびオリジナル啓発グッズの作成・配布、「未来の子どもたちへのメッセージ」の募集・展示、学内展示コーナーの設置、学内図書館での子ども虐

待防止啓発コーナーの設置、大学祭でのブースの設置、WEBによる「子ども虐待認識度調査」の実施など、これまで実施してきた活動を継続して行った。さらに、対面による活動が全面的に解禁されたことにより、大学祭でのブースでは資料の掲示だけでなく、「189」情報を記載したポケットティッシュの配布、オレンジリボンをイメージしてもらうことを意図した親子交流ゲームコーナーの設置をした。特に、親子交流のゲーム企画を行ったことは、「虐待防止は子育てを支えること」という意識が芽生えるきっかけとなったと思われる。さらに、こ



図16 他大学区との交流



図17 大学祭ブースのゲームコーナー

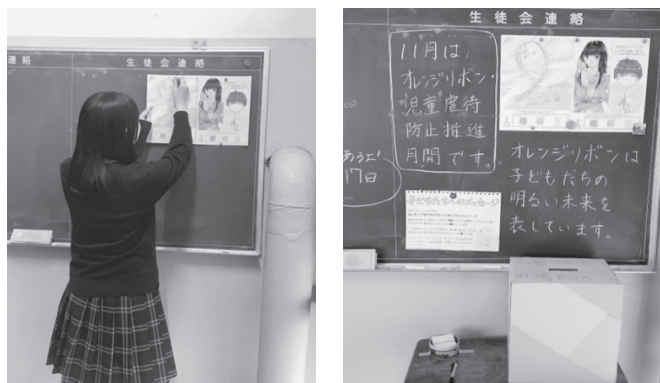


図18 高校へのオリジナル啓発ポスターの掲示

の2年間の活動は、児童虐待防止全国ネットワーク主催の活動報告会の報告校4校のうちのひとつに連続して選出されて、動画による報告を行った。

4. 活動の課題と今後の展望

1年ごとにメンバーのおよそ半分が入れ替わっていくゼミにおいて、それぞれの学生のモチベーションを維持していくことが重要である。そのためには、ひとつの年度で「やり過ぎないこと・やり切らないこと」が大切である。これは、活動の初期に掲げた「続けること・続けられること」とほぼ同義である。単年度でやりすぎると、次の年度での取り組みに新鮮味がなくなり、活動への魅力が半減してしまう。

一方で、広報・啓発活動には、継続性が必要である。単年度にどれだけ華々しい広報・啓発活動を行ったとしても、それが浸透していかなければ、ただのイベントになってしまう。継続性とは、これまでやってきたことをやり続けることでもある。しかしながら、継続していくためには、単にやってきたことを繰り返すだけでは続かない。継続しつつも、新たな取り組みを試みることで、継続するためには必要でもある。つまり、広報・啓発という本来の目的と活動の原動力である学生のモチベーションを維持するためには、継続性と新規性の両者を両立させることが大切であるということである。具体的には、調査、学習会、展示、図書紹介といった学内活動を継続させつつ、他大学との交流や高校生向けの学習会など学外での活動に新規性を持たせつつ、実践していくことになると思われる。もちろん、そのためには、普段の授業時間内での学習も欠かせない。

また、あくまで学生が主体の活動であるので、教員からはアドバイス程度にとどめることが重要である。しかしながら、メンバーが変わっていくというゼミにおいて、新規性を求める傾向は強い。新たな活動に取り組もうとするあまり、これまでの活動を軽視しがちである。この点においては、学生の自主性を損ねない程度に介入し、修正を図る必要がある。

おわりに

本ゼミ学生によるオレンジリボン運動は、「続けること・続けられること」を基本理念として、「やり過ぎないこと・やり切らないこと」を常に意識しながら、活動の内容を確認し、6年間の活動を続けてきた。土台づくりからスタートした活動は、コロナ禍による活動制限の影響を受けつつも、活動の内容と範囲を拡大してきた。そして、現在は“仲間づくり”を目指した活動に取り組

んでいる。

子育て準備世代でもある大学生が、子ども虐待に関心を持ち、オレンジリボン運動に参画することは、虐待予防という側面においても、子育てを社会で支えるという側面においても意義があることである。本ゼミの活動が学内でも定着し、11月の児童虐待防止推進月間には学内がオレンジ色に彩られる日が来ることを期待しつつ、そして、広報・啓発という目的を見失うことなく、新規性も取り入れながら、継続していきたいと考えている。加えて、この活動を経験したゼミ生学生たちが、在学中の活動としてイベント的に終了するのではなく、卒業後も、子ども虐待のない社会を目指す一員として、後輩たちの活動を支えてほしいと願っている。

注

- 1) 子ども家庭庁による「児童相談所における児童虐待相談対応件数」によると2022(令和4)年は21万9,170件(速報値)で、前年度比+5.5%となっている(子ども家庭庁)。
- 2) 小山事件。2004年、栃木県小山市で3歳と4歳からなる2人の兄弟が実父の友人から繰り返し暴力を振るわれ、橋の上から川に投げ込まれて死亡させられた事件。

参考資料・文献

- 子ども家庭庁「令和4年度児童相談所における児童虐待相談対応件数(速報値)」20230401_policies_jidougyakutai_19.pdf (cfa.go.jp) 最終閲覧日2024.7.30
- 認定NPO法人児童虐待防止全国ネットワーク「児童虐待防止全国ネットワーク20年のあゆみ——子ども虐待のない社会を目指して(ダイジェスト版)」2021
- 辻尾朋子・加藤曜子「大学生によるオレンジリボン啓発活動の有効性」『流通科学大学論集——人間・社会・自然編』第26巻第1号 9-16 流通経済大学 2013
- 松尾由美・桑原千明「子ども学科学生によるオレンジリボン運動の取り組み アザレア祭でのオレンジリボン広報・啓発活動」『関東短期大学紀要』57-60 関東短期大学 2015
- 大熊信成「児童家庭福祉制度と学生による児童虐待防止運動(オレンジリボン運動)の取り組み」『佐野短期大学研究紀要』第28集 117-126 佐野短期大学 2017
- 金 潔「実践報告 ソーシャルワーク演習におけるソーシャルアクション学修—地域に根ざすオレンジリボン運動の試みから—」『鴨台社会福祉学論集』第29集 39-48 大正大学共生社会学部 2021
- 宇野耕司「事例報告 大学生による児童虐待防止啓発運動の実践報告—社会人基礎力の育成に有効か—」『高等教育研究』第27号 39-47 高等教育研究所 2021
- 柴田長生「学生によるオレンジリボン運動——保育士養成課程における9年間の取り組み」『こども教育学部研究紀要』第2集 91-105 京都文教大学 2022
- 村田ゼミ「学生によるオレンジリボン運動愛知県立大学実施報告書」平成30年度～令和5年度 認定NPO法人児童虐待防止全国ネットワークホームページ <http://www.orangeribbon.jp/zenkokonet/> 最終閲覧日2024.7.31